

舞台戯曲

# 日本の面影

山田太一



集英社

舞台戯曲

# 日本の面影

山田太一



集英社

## 初出誌一覧

|              |           |
|--------------|-----------|
| 「河の向こうで人が呼ぶ」 | すばる91年4月号 |
| 「サンフランシスコ案内」 | ” 92年10月号 |
| 「日本の面影」      | ” 93年5月号  |

## 日本の面影

一九九三年 七月一〇日 第一刷発行

著者 山田太一

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二五一一〇  
郵便番号一〇一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、本社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1993 TAICHI YAMADA

Printed in Japan ISBN4-08-774013-7 C0093

目次

河の向こうで人が呼ぶ

5

サンフランシスコ案内

119

日本の面影

145

巻末対談／山田太一の劇世界

木村光一／山田太一

265

A 装  
D 丁  
岡 梶  
邦 山  
彦 俊  
夫

# 日本の面影



河の向こうで人が呼ぶ



登場人物

高梨典彦

” 佳代子 (その妻)

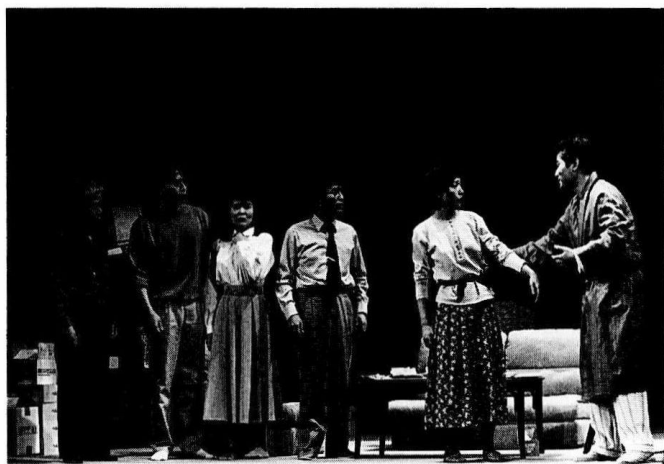
” 正人 (その長男)

” 麻美 (その長女)

高梨真司 (その父)

吉野均 (医師)

高梨道代 (典彦の死んだ母)



## 第一幕

### 第一場 高梨家の居間

マンションの一室。五階である。ベランダに面していて、外もアパートビル群である。上手手前は台所へ通じ、奥に夫婦の和室への戸襖がある。

下手手前は娘の麻美の洋室へのドアがあり、奥に玄関。

居間は散らかってはいないが、物が多いせいで雑然としている。ヨーロッパとバリと台湾へ行った時の人形とかお面のようなものもある。佳代子がセールスをしている健康食品（と称する錠剤やカプセルの栄養剤）の段ボールなども数箱積まれている。

三月下旬の夕方。

ベランダへ出るガラス戸が一枚あいている。カラスが鳴いている。空が赤い。

ベランダで、手すりに掴まって、下をみている真司。その真司の脱いだばかりのコートとマフラーはソファの背にかけられている。

佳代子

（台所から盆にのせた急須、湯呑みを持って現われ）すみません、お待ちせして（とベラ



佳代子 でもお正月の時は。

真司 その神社の階段を二段ずつかけ上った。

佳代子 はい。

真司 ジョギングをしてたからね。

佳代子 じゃ、今はジョギングはもう？

真司 ハハハ、出来るわけがない。

佳代子 いえ——。

真司 (急にキビキビと体操のようなことをし) どう。(と決める)

佳代子 え。(とあっ気にとられる)

真司 (スタスタと部屋の中を若者のようなスピードで歩いてみせる)

佳代子 (なにか気味が悪くもあり) お義父さん。

真司 (バツと止り、両手をひろげ) 七十三に見える？

佳代子 いえ——。

真司 ハハハ、勿論見えるよ。髪は充分白いし肌はシミと皺で見えるかげもない。

佳代子 そんな——。

真司 しかし、自分では、どうも七十三という歳と折り合いが悪い。さっきもね、駅の階段を

パパーッと昇ってね、何人も追い越して改札口を出た。

佳代子 すごい。

真司 笑ってる。(と佳代子を指さす)

佳代子 いいえ。

真司 いやいや、こんなことを自慢そうにしゃべるってことが、そもそも七十三の証拠だけだね。

佳代子 お若いです。

真司 駅からの道を、すたすた歩きながらね。

佳代子 はい。

真司 なんか私はいけないんじゃないか。どうかしてるんじゃないか。

佳代子 なにが？

真司 七十三にもなって、どんどん人を追い越してね、ほら、この頃の若い連中は歩くのおそい、ちつとも急がない。

佳代子 ほんとに。

真司 ところがこっちは訳もなく急いじまう。大通りの交差点を小走りに渡りながら、自分は見苦しいんじゃないか？

佳代子 何で？

真司 七十三にもなったのに、四十五十のスタイルで生きている。

佳代子 結構じゃありませんか。

真司 こんにちはアなんて、息子のところへ顔を出す。これは、息子の嫁である、あんたにとっても当惑することなんじゃないか。

佳代子 めったにいらつしやらないじゃないですか。

真司 めったに来ないから、その間に歳をとったことにしちゃおうかって、さっきエレベーターの中で考えた。

佳代子 そんな、お義父さん——。（と苦笑する）

真司 もういい加減に七十代のスタイルを身につけなくちゃいけない。

佳代子 さ、どうぞ。（とお茶をすすめる）

真司 有難う。嫁のあんたが一人でいるところへ訪ねる舅が、あんまり元気では、あんたも落着かないだろう。

佳代子 考えすぎです。

真司 そうなんだ。そういう下らないことを考えて、老いこんだふりをしてみせちまうという軽佻浮薄が大体、七十代の人間のすることじゃない。どうもスタイルが決まらない。変に元気でね。枯れた味を出したいんだが、そういう風格がちっとも身につかないんだよ。

佳代子 お元氣なら何よりです。さあ、どうぞ。

真司 いや独り暮らしは、相手が見つかるかどうかどうもおしゃべりになってね。

佳代子 こんな甘いもの、よくないかもしれないけど。（と菓子をすすめる）

真司 ああ、よくない、こういうのは、食べたいけど食べないようにしてる。

佳代子 お煎餅を買いおうと思つてたのに、時間がなくなつて。（と立つて、なにかないかと台所の方へ）

真司 お茶だけでいいんだ。この頃は辛いものも甘いものも毒のような気がしてね。あ、そうだ。カルシウムある？ 正月にもらつたの、丁度なくなつちまつてね。

佳代子 カルシウムは、さし上げますけど。（と戻つて来る）

真司 今、つまむよ。

佳代子 今ですか？

真司 この四日ほど切らしてるんだ。

佳代子 (段ボールからカルシウムの瓶を出しながら) でもお茶受けにカルシウムっていうのも。

真司 いや立派なもんだよ。妙な着色料や防腐剤の入った菓子よりずっと気がきいている。

佳代子 じゃあ、これ(カルシウムをわたし)、ビタミンBは、まだありますか？

真司 いや、かなりね、もう。(へってる)

佳代子 ビタミンEもお正月にたしか――。

真司 ああ貰ってる。しかし、いいんだよ、商売ものをそんなに貰ったら、あんたの稼ぎがなくなっちゃう。

佳代子 (二つの健康食品と称する錠剤やカプセルの入った瓶を真司の前へ持って来ながら) 南関東ブロックでここンとこ、ベスト・ファイブに何度も入ってるんです。

真司 セールスの？

佳代子 ベスト・ツーも一回、先々月。

真司 凄いいじゃない。

佳代子 だからこのくらい、なんでもありません。

真司 ありがとう。いや貰い物で嬉しいのは、栄養剤と米だけ。あとのもんは、独り者だと量が多くてね。(と早速カルシウムの瓶をあけにかかる)

佳代子 ほんとに、今日は。(と一礼)

真司 うん？ (とあけている)

佳代子 勝手な時だけ電話をして。

真司 その程度のつき合いが一番いいのさ。典彦のことっていったね？

佳代子 はい――。

真司 だから来たのに、べらべらと下らないことばかりしゃべって。ハハ、佳代子さん綺麗だからさ、ここへ来るとつい上ずっちゃうんだね、私は。（すぐ反省し）あー、なんてことを、息子の嫁に私はいってるんだ。これが七十三だなんて、成熟しないにも程がある。ハハハ、クーツ。

佳代子 （うつむいている）

真司 （自制して）失礼。あいつのことって、なにかな？ （と老人振りをとり入れようとする）  
佳代子 （うなずき）はい、実は、あの。（話そうとすると）

玄関のドアの開く音。

真司 あ、私が、つまらないことを。（いつていたから、と老人振りでいう）

正人の声 お母さん。

佳代子 正人です。（玄関へ行きながら）来られたら来てっていつておいたんで。

真司 そう。（と老人振りでいつてみるが、なんだかしっくりせず）そう。（と小さくいつている）  
そう。

佳代子 おじいちゃん来てるの。（と戻ってくる。正人用の湯呑みをとりに行く）

真司 正人か。（老人振りでいう）

正人の声 こんにちは。お正月以来だね。（と現われる。大学二年生である。ハンティングワールドあたりのシヨルダーを提げていて、それを一方の椅子にほうり）元氣？



真司 ああ、元気だ。

佳代子 (湯呑みを持って戻って来ながら) コーヒーかなにかのみたい？

正人 ううん、お茶でいいよ。

佳代子 (お茶の仕度)

真司 どうだ、アパート暮らしは。

正人 どうってことないよ。

真司 だったら横浜の大学ぐらい、ここから通えばいいのに。

正人 そのことは説明したでしょう、正月に。

真司 そうだったかな？

正人 このマンションはせまいんだよ。こゝでぼくは寝てたんだからね。麻美も短大へ入ったし、俺がアパート借りて出て、アパート代は自分で稼ぐ。みんなで少し広く使えばいいよって、こっちは親孝行のつもりなんだから。(と少し強い口調になる)

佳代子 なに大声出してるの？

正人 だって親子の間ですんなり了解した話を、おじいちゃんはまだ、むし返すから。

佳代子 軽くいっただけでしょう。ねえ。

正人 軽くでも嫌なんだ、そういうことをいわれるの。

真司 こりゃあ女を連れこんでるな。

正人 なにいうの。

真司 そうキークーいうのは、どっかうしろめたいんだ。

正人 まいったな。いま時、アパートに女の友だちが来たからって、なんだっていうの？